

# 安土桃山時代における代用人蔘

日本医史学雑誌第五十二巻第三号 平成十八年一月三十日受付  
平成十八年 九月二十日発行 平成十八年五月十四日受理

松岡尚則<sup>1)</sup>・山下幸一<sup>2)</sup>・村崎徹<sup>3)</sup>

1) 高知大学医学部腫瘍局所制御学

2) 高知大学医学部麻酔・救急・災害医学

3) 神戸大学大学院医学系研究科環境応答医学講座環境医学分野

〔要旨〕 文禄・慶長の戦乱であった十六世紀、輸入薬であった人蔘は、極めて少量の流入であったと考えられる。こうした時代に、来日していた経東・金徳が人蔘の代わりに代用の人蔘を使用したという記録を認めた。経東は人蔘を採取するときは、人に見せないようにしていたようであるが、『詔謀記事』には、金徳が蔓蔘もしくは零餘子人蔘を使用したという記録が見られた。この人蔘は *Codonopsis lanceolata* または *Sium ninsi* L. の根であると考えられた。

キーワード——代用人蔘、文禄の役、金徳、経東

## 緒言

文禄・慶長時代において、日本に大量の韓医籍や韓版漢医籍、人材が伝来したとされる。こうした戦乱の時代、輸入薬であった人蔘は、征韓の将士の手より多少は取られたと想像されるが是とて極めて少量の流入であったと考えられる。それは、当時朝鮮には官私人蔘の貯蔵無く、直接兵士が之を採取することは生地が深山の故に不能であった。

当時、来日した経東・金徳が代用人蔘を使用したという記録を認めたので考察する。

## 方法

経東・金徳関連の書物：『詒謀記事』入江正雄 一七七三（安永二年）高知県立図書館蔵、『土佐物語』森文庫本（森写本）全三十巻 一七九七（寛政九年）需 高知県立図書館蔵、『土佐国人物志』土佐国人物志之四 高知市立図書館若尾文庫における人蔘の記載を集め、これに対する記録を考察した。

## 結果

『詒謀記事』には、「朝鮮陣に元親君数々生捕を国へつれ来り玉ふよし。其内に金徳といふ名醫有り。布師田粉川元庵療治金徳傳といふ正傳を得足る否を知らず。金徳常に蔓蔘をほりて遣ひけると云ふ。蔓蔘は砂蔘の類にて蔓有。葉は忍冬かづらに似て、かづらやわらかにて色青し。葉は両々相對して、茎をつみ切れば乳汁の如き汁出る故。羊乳根ともいふ。根は砂蔘とも違、生姜の如くにて長からず。近山にもたまたまあれども沢山になし。又一説には金徳は零餘子（ムカゴ）人蔘を作りて用とも云。」との記載が見られた。

『土佐物語』には、「経東常に言ひけるは、「当国よき人蔘有り」とて、大きな丸合羽を着て山野に出で、草むらに座して合羽の内にて是を取り、葉をば人の見ぬ所へ捨てたりしとかや。あはれ親炙して是を学びば、いかに医工を和朝に伝え残すべきものを。邪なる妬み故無法の死を与へて、天下の宝を失ひけるこそうたてけれ。」との記載があった。

『土佐国人物志』には、「経東が手書する所の医業、今彼家に蔵す。又所持せし細器等を持ち伝うと言う。経東用ふる所の薬種多くは当国山野にて掘取り製して用いしと也。人参なども当国にありとて取りしが、人参を取るには秘して人に知らせざりしと也。」と書かれていた。

## 考察

豊臣秀吉の戦争を契機に最大の影響を日本に与えた。その中心は多量な李朝版医書と出版技術の伝来であったが、人材も伝来したとされる。<sup>(2)(3)</sup>長宗我部家も朝鮮半島に出兵し、複数の医師を連れ帰っている。この中に、経東という医師がいたとされる。経東は朝鮮國の医官とされ、金徳、金徳邦、金徳許、金徳許徳原、金得拜、金得許、きんと、きんととも記される。<sup>(4)(5)</sup>経東は、文祿の役において、(文祿二年) (癸巳) 長宗我部の軍に捕らえられ、土佐(高知)に來日している。<sup>(6)(7)</sup>この経東は、明人雲海士に学んだため、彼の医術は雲海士流ともいわれる。<sup>(8)</sup>『治代普蹟記』には、当時の上方における主要な医学の流派が記載されているが、この中に、「先年元親代高麗より渡海きんと流」との記載されており、慶長時代には、雲海士流は、上方では有名な医術のひとつであったことがわかる。<sup>(9)</sup>

安土桃山時代という当時の政治状況を考えると、容易に輸入薬であった生薬が手に入るとは限らない。このうち、今村頼は、次のように安土桃山時代の人蔘を考察している。

「織田豊臣時代に使用されたる人蔘は何れに得たるか、又、其人蔘が眞物なりしやに付て考ふるに。朝鮮との公け

の交通は中止せられ、唯僅かに一回天正五年妙心寺の僧釋天荆が足利義堯の使と偽はり交通したるのみ。(此時天荆は自己の病の爲と稱し牛黄・人蔘を請求したり) 其他朝鮮兩國への私の交通も亦行はれざりしが醫學天正記にある貴顯の療法には必ず真人蔘を用ひられしと見るべく。蓋し前期足利時代の貯藏の殘餘又は朝鮮と對馬との密貿易により少量輸入されしものを用ひたりと推測せらる。後期に至り慶長文祿の役興りし後は征韓の將士の手より多少は齋られしを想像するも是とて極めて少量と見るべし。何となれば、當時朝鮮には官私人蔘の貯藏無く、直接兵士が之を採取することは生地が深山の故に不能なればなり。要之に此期に於ける眞の人蔘の使用量は餘り多くには達せず。庸醫輩の使用したるものは悉く擬人蔘にして、真人蔘の藥効に干りし者は少數の上流社のみなりと斷定すべし。」とあり、安土桃山時代、身分の高いものは本物の人蔘を使用できたであろうが、実際には代用の人蔘が使用されたのであろうと考察している。<sup>(1)</sup>

安土桃山時代以前の代用人蔘の使用状況では、『醫心方』諸藥名第十の中に、「人蔘 和名加乃爾介久佐一名爾己太一名クマノイ 砂蔘 唐 丹蔘 唐又殖美濃國 此唐トアルハ當時日本ニ無ク唐藥ニ依ルベキモノトシタルナリ美濃國ニ殖ストハ當時唐種ヲ取寄セ栽植セルヲ指ス。」とあり、カノニゲグサ、ニコタ、クマノイとして何らかの植物にて人蔘の代わりのものを使用していたと考えられる。<sup>(10)(11)(12)</sup>

『福田方』の草部には、「人蔘 和唐 慮頭ヲ去ヨロヅヲハカフトヨム此フトミヨリ上ノホソキライウソノ所也食之反吐ノ病ヲ生ズル也故ニ去之。方云、堅實(くみ)ノ入ヲ塊(まはり)ニ大紫暈トテ切目ニムラサキ色ニ輪ノマハリタルヲ上品トス。虚泡者(うつけあはき)ハ下也、下品ニ兔如此ナル也。或云、心無ヲハ齊苳トスト雖モ其華カ人蔘ニカハレル也。鎌倉人蔘ト云少シ良シ。洛陽邊ノ者ハ虚泡ニ兔不好、齊苳ノ類カ。」

と代用人蔘が示されており、心無を齊苳とするというが、その華は人蔘にかわるといい、鎌倉人蔘といって少し良く、洛陽(京都)辺りのものは、良くないといっている。<sup>(13)(14)</sup>

室町時代、さらに、「真人参は支那よりは一根をも入りたる事無く悉く朝鮮一方より入りたるものにて、此を國交贈品と貿易との二項に區別す。前者は高麗の末期郭夢周が日本九州探題今川了浚の許に使せし三年前天授元年、羅興儒を京都に遣はし海寇禁壓を請ひし時に始まり。明徳六年足利義植迄にして、此百二十一年間に約二千三百餘斤。後者は史の記載に殆んど漏れたるのみならず、密貿易も相当に行われたと考えられ、足利中期の貿易の盛なりし頃には禮物と併せて一箇年、三、四百斤にはでざるべく、假りに一年三百斤とし、一剤一日分の處方量平均五錢とせば、延剤数九千六百劑。此の推定量より見れば上中流以外には行渡らず、他は大抵疑人参を使用したものなるべし。」と今村軈は推定している。<sup>(17)</sup>

江戸時代に入っても、人参が山中に自生する「山参」であることから、採取できる量にはばらつきがあり、朝鮮側の人参政策の影響もあつて、年間の輸入量は常に不安定であつた。<sup>(18)</sup>

明医一官何欽吉が一六四六(正保三年)に内之浦に入津して程なく都城郊外の梶山の山中で和人参(竹節人参)を發見。<sup>(19)</sup> 通説では、この年代が「寛永年間」とされ、梶山(都城領梶山外城・宮崎県三股町梶山)は妻の実家があつた場所とされている。<sup>(20)</sup> この發見の後、竹節人参は広く使われるようになった。

吉益東洞『藥徵』の人参の項に「朝鮮産は味甘く、その真性に非ず、心下痞硬に用いて無効、本邦産をとりて用いると大いに効果がある。苦を殺す勿れ。」と示したこともあり、竹節人参の使用を推奨している。<sup>(21)</sup>

『土佐州郡志』には、高岡郡四万川村、越知面村および芳生野村で小人参の記載があり、土佐でも竹節人参(小人参)が生産されたことが判る。<sup>(22)</sup>

また、一七二一(享保六年)日本に人参の生草を入手し、<sup>(23)</sup> お種人参が日本にて生産されるようになる前は、人参(Panax Ginseng)は輸入にたよっていた。真物の人参が多く使用されるようになったのは、江戸中期に入ってからこのことのように、雨森芳洲『たはれぐさ』には「某し若き時武蔵に在りしに、其頃迄は人参を用ふる醫師甚だ稀な

り。若も人蔘を用ふる醫師甚だ稀なり。若も人蔘を用ふる醫師あれば下手なりといへり。世の人人蔘の功ある事を知らずとて杉某と云へる醫師常に憂として語りき。其後李士材・蕭萬與など云えるもの、方書世に行はれ、今日此頃に至りて輕き病にも人蔘を用ひざる醫師少なし。若しも人蔘を用ひざる醫師あれば下手なりといへり。去る頃又武蔵に行き杉某にあひしに、世の人人蔘の害あることを知らずと語りて、其事のみ憂ふ徐景山が通介なりとほめけり。定りたる見識ありて世のはやりに従はざるこそたふとけれ。」とあり、雨森芳洲の若いときには、あまり人蔘はもちいられなかつたが、最近は輕い病氣にも人蔘を使用しない医師は少ないと述べている。<sup>25)</sup>

『土佐物語』には「経東常に言ひけるは、「当国によき人蔘有り」とあり、日本にもなんらかの人蔘の代わりとなる植物があつたことが判る。「大きな丸合羽を着て山野に出で、草むらに座して合羽の内にて是を取り、葉をば人の見ぬ所へ捨てたりしとかや。」と記され、『土佐国人物志』にも、「経東用ふる所の葉種多くは当国山野にて掘取り製して用いしと也。人蔘なども当国にありとて取りしが、人蔘を取るには秘して人に知らせざりしと也。」とあり、極力他の人に分らないように採取している。

しかし、『詒謀記事』には、「金徳常に蔓蔘をほりて遣ひけると云ふ。蔓蔘は砂蔘の類にて蔓有。葉は忍冬かづらに似て、かづらやわらかにて色青し。葉は両々相對して、茎をつみ切れば乳汁の如き汁出る故。羊乳根ともいふ。根は砂蔘とも違、生姜の如くにて長からず。近山にもたままたまあれども沢山になし。又一説には金徳は零餘子（ムカコ）人蔘を作りて用とも云。」と伝聞であるが、比較的はつきりとした植物の特徴を示した記述が認められ、この特徴を考慮すると、蔓蔘は、*Codonopsis lanceolata*、零餘子（ムカコ）人蔘は *Sium ninsi* と示していると考えられた。

蔓蔘（羊乳根）（*Codonopsis lanceolata*, Benth.）<sup>26)</sup> 砂蔘（沙蔘）（*Adenophora verticillata* Fich.）<sup>27)</sup> 薺苳（*Adenophora stricta*, Miq.）の扱ごころは、江戸期に至るまで、混乱がみられる。実際、一七一一（正徳元年、

肅宗三十七年) 北尾春圃と、朝鮮通信使における医官奇斗文との『桑韓医談』においても、この違いについて問いただす問答がみられる。ここでは、奇斗文は「薺苳一名蔓參」と答えている<sup>(25)</sup>。今村鞆は『人參史』の中で、「蔓參マンシン 羊乳根日本ツルニンジン」の朝鮮名。此蔓參の名今に朝鮮内に通用せり。」と書き、『五州衍文長箋散稿』産後鶏蕒辨證説を引用している。「今産後の百病薺苳 俗名蓋多貴或は蔓參と稱すの生(ナマ)なる者を取り、陳(フルキ)雌鶏と同煎膏を成し汁を取り、服。而して立るに甦る」とあり、「鞆曰、此薺苳とあるは、乳羊根日本名ツルニンジンをさしたるものにて。沙蔘則ソバナを指したるに非ず。又、蓋多貴の蓋の字はトカ又タの音のある字の誤なるべし。此書寫本にて傳はり全卷誤寫多し。著者は憲宗時代の人なれば、今より約百年前に既に此蔓參の稱ありを知る。蓋或は蠱の字の誤寫か。」と今村鞆は記載している。また、一七二八(享保三年)より幕府の命によって始まる朝鮮藥劑調査においてみられる薺苳については、「越常右衛門報告 三」(享保六年十月二十日)で「一、薺苳 右之文字書付遣シ東萊藥店許裨將方より其品取寄申候処、和名難相知候二付、何も生を見申候時之形色絵圖仕、根葉相添差上申候」と書かれ、丹羽正伯『東医宝鑑湯液類』では、薺苳 ヒキヲコシ、村田懋磨はソバナとする等、はつきりしない点も見受けられる<sup>(26)</sup>。

このように、日本のみならず、朝鮮においても、蔓參、砂蔘(沙蔘)、薺苳の扱いについては混乱がみられるものの、『詒謀記事』の記載は、蔓參は、*Codonopsis lanceolata*、零餘子(ムカゴ)人參は *Sium ninsi* L. を示していると考えられた。

『詒謀記事』は、谷泰山の門人・入江正雄(彌内と称す。土佐の人。一七八四(天明四年)六月十五日没。)によって編修された書物で、巻頭の宮地春樹の序文によれば、一七七三(安永二年)とあるので、この年完成したと考えられている。編修の意図は、序文にあるように、その見聞録によって善悪ともに後世読む者が教訓として行いを慎むためである。経東(金徳)の時代から約二百年間があり、『詒謀記事』は経東(金徳)自身が記載したもので

はなく、二次的史料である。したがって、入江の時代の知識が混入している可能性は否定できない。しかしながら、『詒謀記事』の内容については、一七三五（享保二十年）に長岡郡衣笠村（南国市）で掘出した中国の元の銭四貫文余についても、すぐれた時代考証をなし、谷秦山の最後およびその葬儀等についても、正確な記録をしている。こうした点を考えると、経東（金徳）についての内容もできるだけ、忠実な伝聞を記述しているのではないかと考えられた。

朝鮮半島では、李朝に入って、医学が発達し、医療が普及するに及んで、明から大量の薬剤の輸入を必要とした。しかしながら、大量の薬剤を輸入せんとすれば、多額の国費の流出が伴い、一面明からの買求も制限下にあったから簡単に行われなかった。かくしてここに、自主的薬剤供給によって打開する必要に迫られたのである。唐薬と郷薬（半島の薬のこと）との異同を検討し、自国産で役立つものは極力これを使用し、或いはその知識を結集して『郷薬本草』を編纂するなど、郷薬の普及引いては唐薬の防遏へと、万全の施策が講<sup>(28)</sup>ざれた。こうした背景もあり、経東が日本にわたっても、医療を継続できた一つの理由として代用人参に関する知識をもっていたと考えられた。

### まとめ

文禄・慶長年間に来日した経東による代用人参の記録を発見した。経東ははっきりとした代用人参を当時の日本人には示さなかったが、『詒謀記事』によると、*Codonopsis lanceolata* または *Sium ninsi* L. であった可能性がみとめられた。



## 謝辞

調査にあたり、韓国側から協力といただいた孟華燮漢醫院 孟原模先生、柳恩卿先生に際し感謝を申し上げます。『隱峯全書』『湖南節義録』に金徳邦の記載があることをご示唆していただきました韓国韓醫學研究院 安相佑学術情報部長に対し感謝致します。また、さまざまな点でご指導いただきました日本TCM研究所・安井医院 安井廣迪先生、吉富復陽堂医院 吉富誠先生、名古屋市立大学 牧野利明先生、鍼灸ミュージアム 横山浩之先生には、心より篤く御礼申し上げます。慶熙大学医史学 金南一教授には、金徳邦の生年月日に関する疑問を解決していただき、感謝申し上げます。

## 文献

- (1) 今村鞆『人參史』第五卷人參医葉篇、朝鮮総督府専売局、六二、一九三九(昭和十四年)、思文閣出版復刻版、思文閣出版、京都、一九七一(昭和四十六年)
- (2) 真柳誠「韓国伝統医学文献と日中韓の相互伝播」『温知会会報』三四号、二〇八一—二〇八二頁、一九九四(平成六年)
- (3) 金奉鉉『秀吉の朝鮮侵略と義兵闘争』四〇—四四頁、彩流社、東京、一九九五(平成七年)
- (4) 内藤記念くすり博物館平成十四年度企画展図録『鍼のびびき灸のぬくもり——癒しの歴史——』五〇—五二、二〇〇二(平成十四年)
- (5) 平尾道雄『土佐医学史考』、高知市民図書館、高知、一九七七(昭和五十二年)
- (6) 吉田考世『土佐物語』、一七〇八(宝永五年)、明石書店、東京、一九九七(平成九年)
- (7) 岡本信古『土佐畸人伝』(巻四) 天保甲辰夏六月 若尾瀾水 昭和三年写本
- (8) 臨床実践 鍼灸流儀書集成第六冊、オリエント出版社、大阪、一九九六(平成八年)
- (9) 鎌田勘之丞(家時)『治代普頭記』、高知県立図書館蔵、慶長初期
- (10) 丹波康頼『醫心方』三十卷、九八二(天元五年) 編纂、九八四(永観二年) 奏進

- (11) 今村軻『人蔘史』第五卷人蔘医葉篇、朝鮮総督府専売局、四四―四六、一九三九(昭和十四年)、思文閣出版復刻版、思文閣出版、京都、一九七一(昭和四十六年)
- (12) 今村軻『人蔘史』第七卷参名彙攷篇、朝鮮総督府専売局、一〇七―一〇九、一九三九(昭和十四年)、思文閣出版復刻版、思文閣出版、京都、一九七一(昭和四十六年)
- (13) 友隣(林)『福田方』二卷、一三六―一六七(貞治年間)の成立と言われる。
- (14) 今村軻『人蔘史』第五卷人蔘医葉篇、朝鮮総督府専売局、五十、一九三九(昭和十四年)、思文閣出版復刻版、思文閣出版、京都、一九七一(昭和四十六年)
- (15) 今村軻『人蔘史』第六卷人蔘雜記篇、朝鮮総督府専売局、二三―三〇四、一九三九(昭和十四年)、思文閣出版復刻版、思文閣出版、京都、一九七一(昭和四十六年)
- (16) 今村軻『人蔘史』第二卷政治篇、朝鮮総督府専売局、一九三九(昭和十四年)、思文閣出版復刻版、思文閣出版、京都、一九七一(昭和四十六年)
- (17) 瀬尾昭「鹿兒島の薬用人蔘 まほろしのさつま人蔘」社団法人鹿兒島県薬剤師会八〇年史、鹿兒島県薬剤師会、鹿兒島、一九九一(平成三年)
- (18) 難波恒雄『漢方入門』保育社、一九七〇(昭和四十五年)
- (19) 佐々木綱洋「何欽吉と、その故郷、澄海県(明・広東省潮州府澄海県)——付記・旧都城唐人町天水家媽祖像」、社会文化研究所紀要五二、三五―八一、八幡大学社会文化研究所、二〇〇三
- (20) 吉益東洞『葉徴』一七七―一七八(明和八年)
- (21) 緒方宗哲編『土佐州郡志』宝永年間(一七〇四―一七一二)成立といわれる。
- (22) 『宗家文書』(江戸)御留守中毎日記、東京大学資料編纂所所蔵
- (23) 泉澄一編『宗氏実録』(二)精文堂出版、大阪、一九八八(昭和六十二年)
- (24) 雨森芳洲『たはれぐさ』上、「医師の見識」一七八九(寛政元年)
- (25) 北尾春圃『桑韓医談』一七二三(正徳三年)、皇都書林、万屋喜兵衛 印刷
- (26) 今村軻『人蔘史』第七卷参名彙攷篇、朝鮮総督府専売局、五四六―五四七、一九三九(昭和十四年)、思文閣出版復刻版、

思文閣出版、京都、一九七一（昭和四十六年）

- (27) 田代和生『江戸時代朝鮮薬劑調査の研究』、慶応義塾大学出版会、東京、一九九九（平成十一年）
- (28) 三木栄『補訂 朝鮮醫學史及疾病史』一二六、思文閣出版、京都、一九九一（平成三年）

## A Substitute for Jinseng in the Azuchi Momoyama Era

Takanori MATSUOKA, Koichi YAMASHITA and Toru MURASAKI

Small amounts of Jinseng were imported as medicine from foreign countries as a result of Toyotomi Hideyoshi's War in Korea in the late 16th century. We found reports that Kinton (Kintoku) was used as a substitute for jinseng in the Azuchi Momoyama Era.

It is not shown how jinseng was gathered from kinton, but in Hochokiji, there is a report on the use of the roots of *Codonopsis lanceolata* or *Sium ninsi* L.